



地域人材育成研究

1

特集：各地の高校魅力化プロジェクトを紹介
愛媛県立三崎高等学校せんたん部 生徒インタビュー

発行：地域人材育成研究会



愛媛県立三崎高等学校





愛媛県立三崎高等学校は、四国西端の佐田岬の先端、伊方町にある県立高校であり、県庁所在地の松山市からはクルマで2時間と少し、伊方町役場からは30分ほどの距離にある。

豊かな自然に恵まれており、調査員が訪問した6月下旬には、海は真っ青で透明度が高く、山は緑に染まっていた。

昭和25年度の開設で令和元年で69周年を迎えた。全校生徒は84名（令和元年）で、生徒数減少のため本校の位置づけから分校への高校再編の危機にある。

しかし、同校は少人数だからこそその「個別最適化された学び」を行うことができ、一人一人の生徒が輝くことができると自負している。

高校の地元の旧三崎町にはいくつかの元気なNPOがあり、NPO関係者からの強力な支援を得ている。



特色ある教育



みきゃんブイアート



マーマレードアワードに出品

平成 29 年度は愛媛県の「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」の指定を受けるなど、生徒は地元の祭りの支援、イベントの支援、ボランティア活動を積極的に行っている。

特色のある教育活動としては、生の蜜柑を包んだ「みっちゃん大福」の開発と販売、漂流ブイを活用した「ブイアート」プロジェクトの実行、さまざまな高校、大学、NPO、役場職員などが参加した「せんたんミーティング」の開催、健康体操（「みさこう体操 115」）の考案と施設・イベントでの普及活動、映画『せんたんビギンズ』の作成と上映など、多岐にわたっている。

これらの活動の中心になっているのが、今回インタビューした高校生たちが参加する「せんたん部」である。



地域人材育成研究 第1号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立三崎高等学校

せんたん部生徒インタビュー

樋田有二郎

- 8 せんたん部ってどんな部？
- 11 みさこう体操一五
- 13 やりがいについて
- 15 地元が好きとは
- 18 自分の成長について
- 20 裏方の仕事を巡って
- 22 将来の地域との関わり方
- 25 友人関係を巡って
- 27 教員との関係、先輩後輩関係
- 28 みんなに知って欲しいこと
- 30 高校魅力化の目的と生徒にとっての意義
——三崎高校生徒の学びについての語りから

樋田有二郎



愛媛県立三崎高等学校
〒796-0801
愛媛県西宇和郡伊方町三崎511

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立三崎高等学校
せんたん部生徒インタビュー

樋田有一郎

インタビューは二〇一九年六月二四日、一四時～一六時まで、三崎高校の図書室で、三崎高校が選んだ生徒四名に対して行われた。「せんたん部」の担当教諭が同席して、生徒の活動内容について補足説明を行った。インタビューは樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名である

- あらかじめ用意してあったインタビュー項目は、
- A. 活動のやりがい
 - B. 自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したと思うこと
 - C. 地域についての思い
 - D. 将来の地域との関わりかた
 - E. その他
- である。

調査概要

インタビューアー…樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名
インタビュー日…二〇一九年六月二四日
インタビュー…三崎高校生徒 松山（三年生）、西条（二年生）、伊方（三年生）、上島（三年生）

「せんたん部」ってどんな部？



—皆さんは「せんたん部」とのことですが、なぜせんたん部に入ろうとしたのかを始めに聞いてもいいですか？

松山 僕はもともと他のグループに入りたいことを希望していました。

せんたん部に入るきっかけになったのは、ある先生に「やってみなにか？」と言われたことです。自分で言ってしまうのですが（笑）、入部することを「熱望」されました。

三崎教諭 はい、熱望しました（笑）。

松山 地域を動かしていく裏方の仕事だと聞いて。

自分は裏方のほうが得意で、裏方メインで立ち回りたいと思って入ったのが、一年目の始まりです。

二年目の今は、せんたん部の活動がどんどん大きくなって、続けていけばもっと大きくなるのではないかという思いで活動をしています。

—せんたん部の部長さんとして。

松山 前年度に部長をしていました。

—それは「自分がせんたん部を変えていこう」と部長になったわけ

ですか？

松山 結構、成り行き感がありました。

——バトンを渡された現部長の西条さんはどうですか？

西条 もともと私は三崎出身ではなく、ここから三時間半から四時間かかる市に住んでいて、高校入学と同時に三崎に引っ越してきました。

入学したときは、地域のこととそれほど興味はありませんでした。

あつたとしても自分から活動したいという思いはありませんでしたが、一年生のときに「せんたんミーティング」というせんたん部が行っていた行事に参加して、地域のことを考えることが楽しくて、入りた」と感じました。

二年生になって、グループを分けるときに「入ろう」と決めて入りました。

——せんたん部の印象は入った後に変りましたか？

西条 去年の先輩たちはすごい人で、いろいろとヤバイといえますか。

いろいろな方面に長けている人ばかりで、学校のトップが集まったようなグループでした。それで入りづらいと感じましたが、入ってみたらそうでもなくて、みんな普通の人でした。どちらかといえば変わっているところもありますが、今は楽しいからいいです。

——皆さんに聞きますが、せんたん部は学校のトップですか？ 憧れ

のような人たちですか？

三崎教諭 一年生に聞かないと分からないです。どうでしょうか？

一年生は、君たちのことをどう思っているのか？

上島 私は去年一年間、入っていませんでしたが、すごく入りたかったです。

三崎教諭 今いるメンバーで、最初からいたのは松山と伊方の二人です。

——伊方さんは、せんたん部にどのような経緯で入りましたか？

伊方 私は昔から前に出るのがあんまり好きではありませんでした。

高校に入って、せんたん部とは別に生徒会に入ったのが、せんたん部に入るきっかけになりました。

私も（松山）タケシ君と一緒に、最初は別の班に入ろうと考えていましたが、先生からせんたん部に入らないかと言われました。私はVYS部（※）というボランティア活動に入っていて、そこでイベント参加のお手伝いをする係をして、裏方がすごく楽しいと感じました。せんたん部でも、地域のイベント企画の活動ができるだろうと思っ

——実際に入ってみて、大変でしたか？

伊方 確かに準備や前々から段取りを考えるのは大変なこともありませんが、実際に自分たちが企画したものに人が集まって、それで地域を少しでも盛り上げられたら、うれしいです。

大変さよりもうれしさや、実施して良かったと感じるほうが大きいです。

——上島さんは？

上島 私は一年生のときに体操をつくる班に所属していて、二年生になってもその班を継続することになりました。

私は体操をもっと普及させたいと考えていたので、二年生の頃はずっと体操をしていましたが、せんたん部を見ていて、せんたん部のような活動をしたい気持ちが大きくなりました。

今年体操を続けるべきか、せんたん部に入るべきかですごく迷いましたが、後輩のためにも私がずっと体操をしていては駄目だと感じて、後輩に体操を受け継いでもらい、せんたん部に入りました。

※ V Y S 運動

昭和二十七年に愛媛県で生まれた、社会の福祉と子どもの幸福のため「友愛」「奉仕」「理想」の三つの綱領を掲げた青少年のボランティア運動。V Y S (Voluntary Youth Social worker) は学業や勤務のかたわら、ボランティア運動を通して美しい明日のふるさとづくりを努力しています。

みさこう体操一一五



三崎教諭 いろいろな地域の行事で体操をしています。

——「みさこうたいそう一一五」ですか。

上島 はい。

三崎教諭 彼女が創立責任者です。

——みさこうたいそう一一五の苦労話を教えてください。

上島 本当は体操をつくるのがメインではありませんでした。

もともとは「健康班」という名前で、体を動かすことで地域おこし
ができないか、と体操をつくることになりました。

今は佐田岬のPRソングを使っています。最初は違う曲でつくって
いましたが、地域おこしなら地域の曲を使ったほうがいいだろうと、
その歌に変えました。

人前で話すことは好きではありませんでしたが、私が真ん中に立つ
ことが多く——上から見ると体操をしてきている人の顔や、してく
れてない人がよく見えます。

たくさんしてくれていると、うれしいです。

体操していない人がいると悲しい気持ちにもなりましたが、逆にそ

れを見てしゃべり方を変えたらもっと体操してくれるんじゃないか、と改善点も見えてきました。

二年生に上がったときには、一年生のときのメンバーの中で残ったのは私を含めて三人しかいなかったのです、すごく悩んだ部分もありましたが、今は後輩に託しているので不安な面はありません。

いかにたくさんの人に体操をしてもらえるかについては、苦労しました。

——おじいちゃんやおばあちゃんが、ニコニコしながら体操しますか？

上島 楽しそうにしてくれて、すごくうれしいです。

やりがいについて



——僕が高校生のときはバスケットボール部やサッカー部が学校で輝いている時代でした。

それと比べても楽しそうに見えますが、なぜ「せんたん部」のほうがいいのかわれたらどうですか？

松山 僕は運動が全く駄目で、運動部はモテるだろうという気持ちはありましたが、高校では運動を諦めることにしました。

自分が輝く場所は、頭を使う場所しかありません。

三崎教諭 彼が自主制作映画の主演です。

——映画で海に飛び込んだときは、実際には泳いでなかったんですか？

松山 泳いでないです。実際にあんなことをしていたら今、この世にいないです(笑)。僕ではないです。

運動をするよりは、話し合いで意見を出して、何かをつくっていくほうが自分には合っていたので、映画制作を始めました。なんで続けられるかは、数値的な結果があったほうが達成感は大いからです。

せんたん部では、具体的な数値の成果はあまりないのが現状ですが、地域おこしの面で地域の人に笑顔になってもらうのは、すごく達成感を覚える側面でもあります。

せんたんミーティングや映画の上映、中学生を対象にしたアウトドアのアクティビティーなど、たくさんの人に楽しんでもらえる部分があるので、その面で続けられています。

喜んでもらえることは、すごいやりがいを感じます。

西条 私はせんたん部に入るとき、吹奏楽部にも入っていました。

吹奏楽部は大会には出ずに地域のイベントに出ることが多いです。地域のイベントではおじいちゃんやおばあちゃんが笑顔で見てくれていて、小さい子もノリノリと一緒にダンスを踊ってくれるのですがすぐうれしかったです。

それも、せんたん部につながっています。

せんたん部で自分が直接前に出ることはありませんが、裏方の仕事がいみんなの笑顔につながっていくので、すごくやりがいになります。それが今まで続けてこられていて、すごく好きな理由です。

——自分は裏方でもいい。シユートを決めるよりも。

西条 そちらのほうが目立つし、かっこいいですが、一番しんどいのは裏方なので、それを自分ができていることは誇りです。

多分、気づいてもらえないだろうけれども、見てくれている人は見てくれているので……。それが好きです。

——それは地域の人に言われるわけですか？

西条 せんたん部が新聞やテレビで取り上げてもらえるので、それで声を掛けてもらうことがあって、うれしいです。

——伊方さんにとってのせんたん部のやりがいは？

伊方 地域の人と一緒に活動をしてくれること、自分たちが考えたことで喜んでくれるときや楽しそうにしてくれているときに、活動していて良かったと思います。

さっきもお話しましたが、VYS部に一年のときから入っていて、自分たちが裏方としてイベントで手伝いをしたことが後々、別の形となってみんなに喜んでもらえる。それを見たら活動して良かったと思うし、それはせんたん部とも似ているので、今まで続けてこられています。

——上島さんは？

上島 一、二年の頃に体操をしていて。

体操は人前に立つ活動でした。人前に立つて直接関わることやりがいはあつてすごく楽しかったし、自分はどちらかといえば人前でもしたいのですが、さっき西条が言ったように、企画などで直接関わってなくても、自分たちが裏でしてきたことが地域の人のためになることは、すごくうれしかったです。

自分は地元がすごく好きなので、三崎をもっと良くしたい思いが一番強くて、地域おこしを続けられています。

地元が好きとは



—— 地元が好きですか？

上島 はい。

—— 地元が好きというのは、どんな感じですか？

上島 確かに交通の便やお店の数で考えると便利ではありませんが、小さい頃から知っている人もいるし、こちらが知らなくても向こうが私を知ってくれていることもあります。

助け合いといいますか、そのような心や気持ちがとても好きですし、自然も豊かです。

私は人混みがそれほど好きではなくて……。お祭りも人は少ないですが、盛り上がることは好きです。

何がといわれると難しいですが、いろいろな所へ行ってみても一番住みやすいし、ずっといたいと感じたのは三崎でした。安心できると思いますか、過ごしやすくと感じたのも三崎です。

—— 週末もずっと地元ですか？ それとも週末は、どこかに遊びに行きますか？

上島 たまに遊びに行くぐらいです。

——松山あたりのイオンに行くのですか？

上島 分かります。

松山 結構、人によってまちまちです。

——みなさんに聞きますが、誰かから「三崎はよくない、三崎はよく分らないところ」と言われたら、どんな気持ちになりますか？ そんなふう言われたら、どう言い返しますか？

松山 僕は地元の人間ですが、実のところ、今まで三崎に対してあんまりいいイメージを持っていないタイプでした。

自分の場合は合わない部分も多いですが、合わないと言っているだけではよくないと感じて、今は変えようと動いています。

もともとそういう立場だったので、三崎に対するマイナスな意見があっても、受け止める部分のほうが多いです。

マイナスな意見を言われて感情的になるのではなく、客観的な意見なら改善する必要もあるんじゃないか？ 逆に改善する必要はなくて、このままでいい伝統的な部分はちゃんと残すように向き合っていく必要もあるんじゃないか？ と受け止めたいです。

西条 私は三崎の出身ではないので、どちらかといえばあまりいいイメージはない側でした。

三崎に入学を決めたとき、育った地域の友達からは「行かんほうが

いいよ」や「何もいやん、あそこ」とすごく言われました。

確かにそうですが、三崎にすごく引かれたから私は決めたので、そんなふう言っただけでほしくなかったです。悔しいといいますか、来て見ただけで言っただけでほしくないという気持ちが大きくて、こういう活動にも参加しようと思えました。もっと知ってほしいし、いいところもあるので、それを説明したいです。

伊方 実際に三崎も完璧なわけではないので——完全否定といいますか、三崎は絶対に駄目と言われたらあんまりいい気持ちはしませんが、他と比べて言われた場合には、そこは素直に受け止めます。

少しでも良くできるなら、良くしていけばいいことです。相手も言うからには何か理由があるので、それはそれで聞いてみて、もったいい地域にしていきたいです。

上島 私も高校生になるまでは、田舎にはいたくないから絶対に高校を卒業したら県外に行こうと考えていました。

本当に何もなくて不便で、買いたいものも買えないし、流行りにも乗れないとずっと感じていましたが、高校に入ってからからはちょっと気持ちが変わりました。

個人的な意見ですが、田舎にいますとお金を使う場所がないです。逆にお金で得るものよりも気持ちが悪くなると思いますか、お金を出さなくても自分がいいと思えることがあります。

田舎が好きなら、都会が好きならいいです。

もし便利さを優先する人に言われたのであれば、それは仕方がないと受け止めることもあります。田舎にも素敵などころがあると教え



てあげたいです。
 逆に田舎の人であれば、お互いに共通点もあるので、「こうすればもっと良くなる」という改善点を相手の人と共有したいです。

——よく分かった気がします。

単に郷土愛があつて、ここが大好き、とはちょっと違った感覚を持っているのだと感じました。

都会を全否定するのでもないし、地元を全否定するわけでもない。

全肯定でもないですね。

どちらにも良さがあつて、自分で良くしていくことや、自分で自分の良さを見つけていけばいいと、受け取りました。

ちょっと感動しました。

自分の成長について



——自分が変化したことを教えてください。

上島 私は生徒会長をしています。小学校と中学校でも会長をしていました。

中学校を卒業した後は、前に立つことはせずに普通の高校生活を送りたかったのですが、せんたん部を見ていて、活動したいと感じました。

それでも前に出るのは得意ではないのですが、活動のなかでたくさん人前になる機会が増えたので、人前で話す力や緊張をしなくなった面では成長できました。

伊方 私も自分が前に出なくてもいいと考えていましたが、せんたん部に入って、自分も前に出てもいいという気持ちになりました。

今までよりも自分がしたいことや、意見を言えるようになりました。人前に出るのは今でも緊張しますが、少しずつ人前で話すのが好きになりました。

——せんたん部では、いつも緊張でドキドキしながら活動をしている日々ですか？

伊方 そんなことはないです。せんたん部ではみんな円になったり、机をくっつけて話をしているので。

でもせんたん部の「活動報告」がたまにあつて、そのときは緊張します。

西条 私は全校生徒が六〇〇人以上のマンモス中学校にいたので、個性を出して自分がしたいことをするのができないといいますが……やりづらかったです。

周りの意見に流されることも多くて、それが嫌だったので小さい高校に行きたいと、三崎に来ました。

三崎は自分がしなければ誰もしてくれないことがたくさんあります。自分から積極的にやる必要があるのですが、誰かを待つのではなくて自分で前に出ていけるようになったのが一番、成長したところですよ。

——自分から「あの人に働き掛けてみよう」というような気持ちになるわけですか？

西条 距離が近いので、あの子に言ったらしてくれそう、というのが見て分かるようになりました。

それで同じ学年の人にも話しかけられるようになったし、変わりました。

——松山君は？

松山 考え方の面が変わったところがあります。

悩む前にとりあえずやってみたらいい、と思うことが増えました。ある先生の影響が大きいです。

失敗するのが絶対に駄目ではないことに気がついて、失敗したら失敗したで教訓になって、成功すれば成功体験として、ちゃんと地域おこしにつながります。

やってみないことには何も起きないので、やってみることがすごく大事な部分であることに気がつきました。

もう一つは、前年度にせんたん部の部長をしていて、人に仕事を振ることが大事だと感じました。

今まで自分がリーダーとして何かをすることがあっても、人に仕事を振るのが面倒くさくて、自分で全部やればいいと思う部分がありました。

ただ、人に振らずに自分だけでやっている、周りの人たちはどう動いていいかも分かりません。もし自分のところで動きが止まってしまったら、そこで企画全ての進行が止まってしまうので、ちゃんと周りに仕事を振ることも必要なことに気がつきました。

——大変だったことや、失敗したけど良かったと思えることは？

松山 今まで二回開催している「せんたんミーティング」というイベントがあります。県内外の高校生や大学生に来てもらって、地域おこしの活動報告してもらいます。

地域の人にも見学してもらえるイベントですが、集客があまりよくありません。

原因は広告を出すのが遅かったというのが一番であって、広告をもっと出していたらもっと人が来てくれたのでは、という反省があります。

本年度も「せんたんミーティング」を開催するので、広告を早く打

てばもっと人が来てくれるんじゃないか、と。
改善点が見える失敗だったので、悪い失敗ではありませんでした。

裏方の仕事を巡って

— 皆さん「裏方」がテーマになっていますが、裏方として調整することや話し合いをすることは、自分にとって何か残るものはありませんか？

松山 裏方の仕事は、高校になってから初めてするようになりました。今まで話したのはポジティブな面で、ネガティブな面もあります。

自分は、話し合いが得意ではありません。話し合いの場面になった途端、ありきたりで型にはまった意見しか出てこなくなるので。

逆にみんなはすごく「斜め上のアイデア」を出してくれるので、すごいと感動する部分もあります。

裏での話し合いは表の人が見ることはないので、そこが知れることが裏方をしていて面白い部分です。

— 自分にはないものと、人にあるものに気づく機会になるわけですね。

